



自然遊学館 だより



2006 SPRING

No. 39



■2006.04.10 発行 貝塚市立自然遊学館

■行事レポート

- 「トンボの池の池干し」……………1
- 「春の七草摘みハイキング」……………2
- 「近木川源流探検」……………3
- 「浜辺の打ち上げ物を調べよう!」…4
- 「冬の雑木林千石荘探検と
バードウォッチング」……………6
- 「自然遊学館の友だちあつまれ!」……………7

■生きものよみもの

- サツマヒメカマキリ……………8
- 自然遊学館所蔵チョウ類標本(つづき)…9

【泉州生きもの歳時記】

- ニホンヒキガエル 日本蟾蜍……………10
- 館長コーナー……………11
- 投稿
日本および東南アジア産ズイムシハナカメ
ムシ亜科(半翅目:ハナカメムシ科)の系統
分類学的研究……………13
- 寄贈標本の紹介……………15
- 遊学館スタッフ日誌……………17
- お知らせ……………19

■行事レポート

「トンボの池」の池干し

場所：貝塚市二色 市民の森自然生態園
 日時：2005年12月10日(土) 10:00～15:00
 参加者 42名

1997年に完成した自然生態園の「トンボの池」では、これまでに18種のトンボが確認されています。毎年、年末のこの時期に、池の底に溜まったゴミや植物の掃除をして、トンボをはじめとする水生昆虫が生息できる環境を維持しています。総勢42名で、ヤゴを入れる水槽をつくる係、池に入ってアオミドロをすくう係、アオミドロからヤゴを分ける係、ヤゴや水生昆虫の種名を調べる係に分かれて、作業を行いました。以下に、救出した生きものの種名(個体数)を示しました。

トンボの池にいたヤゴ(3種)

アオモンイトトンボ属(1)、ギンヤンマ(52)、シオカラトンボ(55)

ヤゴ以外の水生昆虫(5種)

フタバカゲロウ属(51)、コマツモムシ(44)、ハイロゲンゴロウ(27)、チビゲンゴロウ(3)、チャイロチビゲンゴロウ(1)

水生動物(水生昆虫以外)

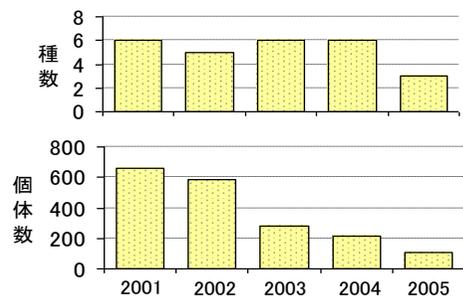
アメリカザリガニ(332)、スジエビ(1)、ミズムシ(1)、ヒメタニシ(5)、ハブタエモノアラガイ(7)、サカマキガイ(20)、メダカ(1397)、キンギョ(1)、イトミミズ類(9)(水生動物の同定：山田浩二)

ヤゴとザリガニの数当てクイズの受賞者は以下の通りです¹⁾。

ヤンマ類：日高菜の花、成澤健、高野晴一郎
 アカネ類：野村匠臣
 イトトンボ類：日高向日葵
 シオカラトンボ：浅井いずみ
 ショウジョウトンボ：浅井夏海、文野勇作
 アメリカザリガニ：江本大地
 スジエビ：酒井陽子

ヤゴは全てシェルシアター内に設置した3つの野外水槽で、ギンヤンマのヤゴ、ギンヤンマ以外のヤゴ、ヤゴ以外の水生昆虫に分けて飼育しました。行事後の池干し時期では、12月11日から19日にかけて、アメリカザリガニ41個体とシオカラトンボのヤゴ7個体を採集し、それ以降アメリカザリガニの死体2個体を採集しました。3月11日まで池の底を干した後、水を入れ、水生昆虫を池に戻しました。

トンボの池で各年に確認されたヤゴの種数に関して、向井(2005)は「2000年に最大の11種になり、以降7～10種の間で安定して推移した(2004年調査まで)」と報告しています。毎年12月に行われる池干し時



「トンボの池」の池干し時に確認されたヤゴの種数と個体数

に限った種数と個体数²⁾では、2001年6種656個体、2002年5種³⁾588個体、2003年6種279個体、2004年6種215個体であったのが、今回は3種108個体となり、種数、個体数とも大幅に減少しました⁴⁾。

大串(2004)によると、「自然の推移に任せたビオトープでは、造成直後に多数の水生昆虫が移入するが、数年のうちに急激に種数が減少し、生物相が単純化する例がしばしば見られた」そうです。市民の森の「トンボの池」では、行事参加者やボランティアの方々による定期的な池干しや掃除などにより植生遷移の進行が抑えられ、ヤゴの生存に適した環境が保たれているはずだったのに(向井、2005)、今回の結果となり、来年以降の変化に注意する必要があります。

- 1) ヤンマ類、アカネ類、ショウジョウトンボでは、個体数0が一番近い予想の方を表彰。
- 2) 後の採集での追加分を除く。
- 3) ギンヤンマとクロスジギンヤンマの個体数をまとめて集計。
- 4) ヤゴの天敵であるアメリカザリガニの個体数は、2001年から1116、250、295、358、332と変化。

参考文献

- 大串龍一(2004)「水生昆虫の世界—淡水と陸上をつなぐ生命—」, 東海大学出版会, 219pp.
- 向井康夫(2005)自然生態園「トンボの池」の生きもの調べ, 貝塚の自然第7号: 35-43.

(向井 康夫・岩崎 拓)

春の七草摘みハイキング

場所: 蕎原・ほの字の里

日時: 2006年1月7日(日)10:45~14:00

参加者 42名

道路の凍結を心配しましたが、時折ちらちら雪が舞う程度、冷え込んだものの風もなく七草摘みにふさわしい天候でした。

集合地で、ポリ袋に入れたセリ・ナズナ・コオニタビラコ・ハコベ・ハハコグサの実物を見てもらい、形も生えている場所もセリと似ているウマノアシガタが有毒であること、ナズナとまちがって食べてもなんら問題はないけれど、見分けにくいナズナとタネツケバナの話をしてもらいました。

今は葉っぱだけのヒガンバナ、お酒の当てになるノビル、よく熟れたものならフルーティーなフコイチゴなど、七草以外の植物にも注意をはらいながら歩きます。

セリは少し湿っぽい場所でたくさん見つけました。なかなか見つからなかったナズナは、踏み固められた畦道にまとまってあり、ハハコグサは細い畦道を見つめて歩くと各家族に1~2株採集できました。参加者に一番なじみのないコオニタビラコ(旧



名：ほとけのぎ)は、苧田の中にたくさんあります。参加者全員がよくマナーを守って5種類をそろえ、最後に川村自然遊学館長から、かぶらと大根(すずな・すずしろ)の葉がプレゼントされました。

今年のほの字の里の七草粥はお餅入り白粥でした。美味しさは格別、ほの字の里名物たくあんや白菜漬物を添え、お代わり自由とあってみんな大喜びでした。

(白木 江都子)



み、道が凍ってる！！

ようやくコンクリートで舗装された道を登りきりましたが、ここからが源流探検の本番！すぐ横が崖になった急な斜面の、大きな岩がごろごろする道なき道を突き進み、目的地である近木川の源流を目指しました。源流まで道のりは険しく、沢に下りたり倒木をくぐったり、時には四つん這いになりながら滑りやすい斜面を登ったり・・・みんな協力しながら数ある難関をクリアして、ついに源流にたどり着きました。参加者とスタッフ全員で記念撮影をし、恒例の記念杭を順番に回して全員が名前を書き込んだあと、打ち込みました。

源流探検

場所：和泉葛城山本谷

日時：2006年1月29日(土) 10:00～15:00

参加者 26名

今年の源流探検、天気は良かったのですが、じっとしていると体が冷え切ってしまうような日に行われました。そんな寒さの中、蕎原のバス停を出発し、斜面の大きなツララや全体が凍りついた滝などを眺めつつ、川沿いの道をひたすら登りました。スタートからおよそ1時間半後、最初の目的地となるお昼休憩の地点までたどり着きました。そこでお弁当と館長の用意してくれた豚汁をみんなで食べて少し休憩したあと、体が冷えてしまう前にトチグラ谷より一つ北の谷に向かう山道を登っていきました。最初はコンクリートで舗装された、けっこう急な上り坂。山道の端から端まで氷が張っている部分などもありましたが、足を滑らせないように気を付けながら一生懸命登っていきました。



参加者全員の名前が書かれた記念杭と一緒に記念撮影

しばらくの間、急峻な源流周辺の環境を見渡しながらか、源流までの道を踏破した余韻に浸っていましたが、バスの時間が近づいてきたため帰路につきました。滑りやすいところや氷が張ったところでは、足を滑らせないように気を付けつつ、焦らずゆっくり下山しました。

今回のコースは下見の時に“少し危ないのでは・・・”と感じていましたが、全員の協力で、無事に難関の源流探検を終えることができました。

(向井 康夫)

各々散らばって探し始めました。アサリ、マガキをはじめたくさんの貝殻や、イカの甲、カニなどの海洋生物や流木、木の実、軽石を含めた自然物の打ち上げがあります。しかし、それにもまして多く目に付くのは、ペットボトルやプラスチック容器、生活用品などの人工物の打ち上げです。これらは海流によって運ばれたものや近木川を下ってきたものですが、もとをたせば人々が少しぐらいと思って投げ捨てたものであり、浜はそれらが集積するターミナルとなっています。

浜辺の打ち上げ物を調べよう！

場所：近木川河口右岸前浜

日時：2006年2月11日(土)13:00～16:00

参加者 47名

冬場の一番寒い時期に、浜辺で潮風に耐えながら行う耐寒行事です。参加者は自然遊学館の前に集合した後、歩いて近木川の河口へ向かいました。右岸側には幅 130mほどの前浜が広がり、海からの漂着物が多く打ち上がるビーチコーミングするには魅力的な場所です。この浜へ降りるには高い潮受け堤防があり、これまで仮設に備え付けてある危険なハシゴを使わなければなりませんでしたが。しかし今回は安全面の配慮から、館長が作成したハシゴを堤防の低い上流側の場所から降ろし、浜へ行ける様に工夫しました。

講師の児嶋 格さんより、北西風の強く吹くこの時期は、打ち上がった貝殻を拾うのに適していることなどの説明を受けた後、



「ママ、こんなん拾ったよ！」

約1時間の採集後、参加者の拾った打ち上げ物を並べてもらい、解説を行いました。貝は海産42種、陸・淡水産6種が記録されました。特にハツユキダカラ、オオネズミガイ、フロガイダマシ、クチキレガイ、コメザクラは近木川河口で初記録でした。昨年の同様に行った観察会では海産貝類は34種類でしたので、今年はよりたくさんの種類が拾えました。貝以外では、カニ類やブーメランのように平べったくなったマヒトデ、オカメブンブクというおもしろい和名がついたウニの仲間などが集まりました。

この中には貝塚市の海岸で初記録となるヒラテコブシというカニが3個体ありました。このカニは水深50~150mの海底に生息するといわれ、海岸で普段眼にするカニではありません。打ち上げ物には、こうした深い海からの贈り物も含まれているのです。



ヒラテコブシ (♀)
甲幅 12.9mm、甲長 14.2mm
打ち上げ死体

館に戻ってからは多目的室で、貝殻を紙のお皿に綺麗に貼り付けて記念品作りです。貝殻の下には一つ一つ種名も記してもらい、標本皿としての役割も備えたものが出来上がりました。今回の観察会の様子は、ケーブルテレビ「わくわく！りんくう貝塚市」の撮影が入り、3月15~31日まで放映されました。

右に本日の観察会で確認できた自然物の打ち上げ物（漂着物）リストを記します。

※ 拾い集めた中にサザエ、ベンガルバイ、ギンタカハマの貝殻がありましたが、人為的に捨てられたと思われるのでリストに含んでいません。

近木川河口右岸前浜の漂着物（自然物）

2006/2/11 自然遊学館観察会 講師:児嶋 裕

		科 名	和 名	
貝類	海産	ヨメガカサガイ科	ヨメガカサ	rr
		ニシキウス科	イシダタミ	r
			コシダカガンガラ	r
		タマキビガイ科	タマキビガイ	r
		カリバガサ科	シマメノウフネガイ	cc
		タカラガイ科	ハツユキダカラ	rr
		タマガイ科	ツメタガイ	cc
			ハナツメタガイ	r
			アダムズタマガイ	r
			オオネズミガイ	rr (L)
			フロガイダマシ	r
			ネコガイ	rr
		アッキガイ科	アカニシ	c
			イボニシ	c
		フトコロガイ科	ムギガイ	r
		ムシロガイ科	アラムシロ	c
		トウガタガイ科	クチケレガイ	rr
		カラマツガイ科	カラマツガイ	r
		フネガイ科	カリガネエガイ	r
			サルボウガイ	cc
		イガイ科	ムラサキイガイ	c
			ミドリイガイ	r
			ホトギスガイ	c (L)
		ハボウキガイ科	タイラギ	r
		ナミマガシワ科	ナミマガシワ	cc
		イタボガキ科	マガキ	cc
		ツキガイ科	イセシラガイ	r (L)
		ザルガイ科	トリガイ	r
		バカガイ科	バカガイ	r (L)
		チドリマスオ科	クチバガイ	r
		ニッコウガイ科	コメザクラ	rr
			サクラガイ	r
			ヒメシラトリガイ	c
		マテガイ科	マテガイ	rr
		イワホリガイ科	ウスカラシオツガイ	c
		マルスダレガイ科	ウチムラサキ	r
			カガミガイ	c
			アサリ	cc
			オニアサリ	r
			イヨスダレ	rr
		オオノガイ科	オオノガイ	r
		クチベニガイ科	クチベニガイ	rr
	淡水産	タニシ科	ヒメタニシ	rr
		リンゴガイ科	スキムリンゴガイ	r
		モノアラガイ科	ヒメモノアラガイ	rr
		サカマキガイ科	サカマキガイ	rr
	陸産	オナジマイマイ科	クチベニマイマイ	rr
		キセルガイ科	ナミキセル	rr
甲殻類		イワガニ科	モクズガニ	c
			クロベンケイガニ	r
			イソガニ	r
		ガザミ科	タイワンガザミ	r
		コブシガニ科	ヒラテコブシ	rr
棘皮動物		マヒトデ科	マヒトデ	rr
		ヒラタフンブク科	オカメフンブク	rr
多毛類		カンザシゴカイ科	エソカサネカンザシの棲管	r
		ナナテイソメ科	スゴカイイソメの棲管	c

凡例：数量 …… cc 多数、c 普通、r 少数、rr ごく少数 (L) …… 生貝確認

(山田 浩二)

冬の雑木林「千石荘」探検と バードウォッチング

場所：千石荘と近木川河口

日時：2月25日（土）10:00～15:00

参加者 34名

冬とは思えない暖かい、穏やかな天候の下、受付をしている間にオオタカ・ノスリが上空を旋回していました。今年は鳥が少なく、木の実もたくさん残っていると感じていましたが、集合時に講師の和田自然史博物館学芸員からも同様の説明がありました。何故？じゃあ何処にいる？は、分からないそうです。

千石荘の「オサガ池」にはカワウがすんでいます。この日も糞で真っ白な周辺の木々にたくさんとまっていて、望遠鏡で覗くと仕草がユーモラスでした。ほかにカイツブリ・ゴイサギ・アオサギ・コガモがいました。その後も目にする鳥の種数が少ないので、参加者の北田誠さんが、三ツ松「カンコ池」に案内していただきました。運良く養魚をされている方がゲンゴロウブナ（ヘラブナ）・ソウギョなどを放流しておられ、養魚にまつわる興味深いお話が聞けました。池にはカイツブリが多く、バンがせかせか動き回り、ゴイサギ幼鳥・コサギ・ダイサギ・アオサギが対岸に群れ、「クイナもいた」の声に盛り上がりました。帰り道、道端のネコを見ていると、その横にキジ♂がいて歓声があがりました。この他に和田学芸員のノートには、ケリ・キジバト・コゲラ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・タヒバリ・ヒヨドリ・シロハラ・ツグミ・ウグイス・エナガ・メジロ・ホオジロ・カワ

ラヒワ・スズメ・ムクドリ・ハシボソガラス・ハシブトガラスが記録されていました。

（白木 江都子）



千石荘の畦道で鳥を探す

午後からは近木川河口と海の鳥を観察に行きました。脇浜潮騒橋を歩いているとなんと！アリスイを観察した参加者がいました。あっという間に通り過ぎてしまったので一人だけしか見られませんでした。

河口では今年の冬から久しぶりにみられているオカヨシガモの姿が見られました。また、カンムリカイツブリもみられました。一羽いるな、と思っていると2羽、3羽とふえていき、合計で6羽のカンムリカイツブリが記録されました。まだ、冬羽でしたが、みんなで一羽二羽と数えて観察しました。カモ類はカルガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、ホシハジロと全部で4種類もみられました。観察者の中でカルガモが海にいるのを驚かれる方もいました。ぽかぽかと暖かい中、楽しい観察会となりました。

（宮本 久美子）

自然遊学館の友だち集まれ

場所：自然遊学館多目的室

日時：3月25日(土)13:00～15:00

参加者 13名

2005年度自然遊学館最後のイベント「自然遊学館の友だち集まれ」は、この一年間、行事に参加した感想や遊学館に来て学んだこと、研究したこと、疑問に思ったこと、来年度やってみみたい企画の提案など、子どもたちが自由に発表する行事です。自然遊学館クイズやオリジナルカードによる神経衰弱など、ゲーム形式で楽しく行いました。行事参加数を持ち点にして、どんどん点数



木室仁太くんの『自由研究ノート』

田中貴大くんとのコラボ

を上げていくと記念品がもらえる仕組み。でも、ただ得点をかせぐだけでは年上の参加者が有利になってしまいますが、そこは遊学館。メインイベントの「成果発表会」は、全員が話し合っ得点を決める方式なのです。

結局、しっかりと下準備をし、レポートにまとめ、発表の練習までしてきた喜多悠香さん(6)が最高得点を得ました。木室仁

太さん、木室豪太さん、酒井陽子さん、酒井智子さん、北本千晴さんにも発表していただきました。



表紙もすてきな喜多悠香さんのレポート

■たのしかったこと：「たわわのいけさらい」スジエビをつかまえたこと。「とんぼのいけにやごもどし」やごとんぼのいけにもどすしゅんかんがすごくよかった。

■いえでかっているもの：「さわがに←→よしのぼり(なかよし)」おなじかわにいたからいつもいっしょにいます。

「すじえび」たわわのいけにいました。

「あめりかざりがに」あかちゃんだったけどすこしおおきくなって、あたまのいろがすこしくろっぽくなってきました。

■ことししたいこと：きのこがりをしたい／とんぼのいけにとんぼをふやしたい／しぜんせいたいえんのくさぬきをがんばりたいです。

最後は恒例の宝探し。市民の森の「どこか」に隠された宝のメモを15分間で探します。毎年スタッフは隠し場所に頭を悩ませ、一生懸命に隠すのですが、参加者全員、記念品を探し出すことができました。

(西澤 真樹子)

■生きものよみもの

サツマヒメカマキリ

2004年6月1日に貝塚市水間公園において清水千尋氏によって採集されたカマキリ（1♀：カマキリ目ヒメカマキリ科）は、これまでに貝塚市内で採集されていたヒメカマキリ *Acromantis japonica* Westwood のメス成虫よりも大型で、前胸背板の最大幅（A）の部分がより外側へ張り出し、後半部のくびれ（B）がきつという特徴から、サツマヒメカマキリ *Acromantis australis* Saussure と同定しました。

このメス成虫ではA/Bの値が1.95で、自然遊学館にあるヒメカマキリのメス成虫の標本の1.73と1.76とは異なります。より重要な点は、前胸背板が長いサツマヒメカマキリの方が（サツマ：9.0mm；ヒメ：7.9–8.0mm）、くびれ部分の幅が狭いということです。相対的にくびれているだけでなく、絶対的にもくびれています。

後藤伸さんの「虫たちの熊野 照葉樹林にすむ昆虫たち」（紀伊民報社、2000）によると、「紀伊半島のヒメカマキリに卵で越冬する型と幼虫で越冬する型の2つがあり、この2型間では雌雄が出会えそうにないから、種としての問題がありそうだ」という記述があり、「幼虫で越冬するものがサツマヒメカマキリである」と書かれています。

これまでヒメカマキリと同定されたものは、採集日が10月から11月にかけてですが、6月1日に水間公園で採集されたこのメス成虫は、採集の時点で腹部が十分に膨れていました。貝塚市でも幼虫で越冬する

タイプが見つければいいと思っていたところ、2006年1月26日に当館スタッフの湯浅幸子さんが行事の下見で訪れた蕎原箱谷において「その幼虫」を採集してくれました（図1：3月31日現在も生きています）。これで貝塚市にも幼虫で越冬するタイプが生息していることが明らかになりました。

ただし、本当にヒメカマキリと別種なのかと尋ねられたら、考え込んでしまいます。



図1. サツマヒメカマキリ幼虫
(体長15mm：1月26日撮影)

私が見たサンプル数が少なすぎるということもあります。たくさんの標本を調べれば、先ほどの(A/B)の値は連続したものになるかもしれません。また、形態に違いがあっても、それが必ずしも種を分ける基準にはならないこと、さらに、春に羽化した成虫が秋まで生きて、「ふつうの」ヒメカマキリと交配する可能性も捨て切れないからです。昆虫の種を調べること（同定）はなかなか難しいことで、絶対に正しいということはなく、「仮説」にしかすぎないと言えます。

(岩崎 拓)

自然遊学館所蔵チョウ類標本(つづき)

前号発行後、西村恒一さんに以下の3種の標本を寄贈していただきました。産地はいずれも和泉葛城山の五本松から山頂にかけての稜線です。クモガタヒョウモンは大阪府レッドデータブック(2000年発行)で「準絶滅危惧」に指定されている種で、貝塚市産のものとしては当館所蔵2個体目となります。また、ヤクシマルリシジミは所蔵3、4個体目、オオミドリシジミは2、3個体目です。

クモガタヒョウモン 1♂ 1996年6月15日
 ヤクシマルリシジミ 1♂ 1994年7月17日
 ヤクシマルリシジミ 1♀ 1994年7月17日
 オオミドリシジミ 1♂ 1999年6月13日
 オオミドリシジミ 1♀ 1994年7月2日



クモガタヒョウモン♂標本
和泉葛城山 1996年6月15日
採集：西村恒一

その際に伺った話では、西村さんが中学生だった1960年代前半には、クロシジミとヒメヒカゲが和泉葛城山の山頂付近に、ツマグロキチョウが千石荘にふつうにいたと

いうことでした。クロシジミの幼虫は、クロオオアリの巣の中で働きアリから口移しで餌をもらうという風変わりな食性をもつことで有名です。西村さんが高校生の時に菊池行道先生から指導を受けたと聞き、当館に収蔵されている菊池行道コレクション(3019点)を見直し、前号の当館所蔵74種に含まれなかった以下の2種(いずれも和泉葛城山)の標本を確認しました。

クロシジミ 2♂ 1960年7月10日
 ヒメヒカゲ 1♂ 1959年7月5日
 ヒメヒカゲ 1♂ 1960年7月1日



ヒメヒカゲ♂標本
和泉葛城山 1959年7月5日
採集：菊池行道

この古い標本を含めると、当館に所蔵されている貝塚市産チョウ類標本は76種ということになります。大阪府レッドデータブックで、ヒメヒカゲは「絶滅種」、クロシジミは「絶滅危惧I類」に指定されています。以下に、前号で紹介した参考記録の2種も含めて、貝塚市で確認されたチョウ類のリストを記します。

アゲハチョウ科 10種

ジャコウアゲハ、キアゲハ、ナミアゲハ、クロアゲハ、オナガアゲハ、ナガサキアゲハ、カラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、モンキアゲハ、アオスジアゲハ

シロチョウ科 6種

キチョウ、スジボソヤマキチョウ、モンキチョウ、ツマキチョウ、モンシロチョウ、スジグロシロチョウ

ジャノメチョウ科 11種

ヒメウラナミジャノメ、ウラナミジャノメ、ジャノメチョウ、ヒカゲチョウ、クロヒカゲ、サトキマダラヒカゲ、ヤマキマダラヒカゲ(目撃記録)、ヒメジャノメ、コジャノメ、ヒメヒカゲ(菊池コレクション)、クロコマチョウ

タテハチョウ科 21種

ミドリヒョウモン、クモガタヒョウモン、メスグロヒョウモン、ウラギンヒョウモン、ウラギンスジヒョウモン、ツマグロヒョウモン、イチモンジチョウ、アサマイチモンジ、コムスジ、ミスジチョウ、サカハチチョウ、ルリタテハ、キタテハ、ヒオドシチョウ、アカタテハ、ヒメアカタテハ、インガケチョウ、スミナガシ、ゴマダラチョウ、コムラサキ、オオムラサキ

マダラチョウ科 1種

アサギマダラ

テングチョウ科 1種

テングチョウ

シジミチョウ科 19種

ゴイシジミ、ウラギンシジミ、ムラサキシジミ、ムラサキツバメ、ウラゴマダラシジミ(きしわだ自然資料館所蔵)、アカシジミ、ミズイロオナガシジミ、ミドリシジミ、オオミドリシジミ、トラフシジミ、コツバメ、ベニシジミ、クロシジミ(菊池コレクション)、ウラナミシジミ、ヤマトシ

ジミ、ルリシジミ、ヤクシマルリシジミ、サツマシジミ、ツバメシジミ

セセリチョウ科 9種

ミヤマセセリ、ダイミョウセセリ、アオバセセリ、イチモンジセセリ、チャバネセセリ、オオチャバネセセリ、コチャバネセセリ、ホソバセセリ、キマダラセセリ

(岩崎 拓)

【泉州生きもの歳時記】

ニホンヒキガエル 日本蟾蜍

どっしりとした体格、たくましい手足。そしていつも何か哲学的なことを考えているような風貌。カエル好きの私の中でも、ヒキガエルの存在はちょっと特別です。

さて、ある日私が出勤してくると、「良いものが届いていますよ」と白木職員。促されるままバケツのふたをそっと開くと…いました！あかね色の混じった、見たこともないような美しい体色の個体。あまりの嬉しさにその場で踊ってしまったほどです。もちろん記念写真も撮りました。

このカエルは3月19日、土砂降りの雨の中でたたずんでいたところを、貝塚市大川在住の山口フミ子さんが見つけ、遊学館に届けてくれたものです。13日に馬場で今年の産卵が確認されてからちょうど一週間後のことでした。

ニホンヒキガエルの繁殖は、秋から翌春にかけての、あたたかく湿った日を選んだように行われます。複数のオスがメスにしがみついて大騒ぎになる様子を「カエル合戦」と呼ぶこともあります。長いひものよ



**ニホンヒキガエルを正面から撮影
なんてかわいいのでしょう！**

うな卵塊の中には6千～1万5千個の卵が入っています。イワシのように群れて泳ぐのが特徴のオタマジャクシは、小さく真っ黒で、子ガエルになり陸に上がってもたったの8mmほどしかありません。

大阪では産卵に使われる水田の減少や開発、小さなため池や水たまりの喪失などの影響を受けて、現在「大阪府レッドデータブック」で要注目種に指定されるほど数が



貝塚市馬場産の幼生 (3月23日撮影)

減ってしまいました。貝塚市では山手を中心にほそぼそと生き残っているようです。去年、自然遊学館で調査と池さらいをはじめた馬場の小池でオタマジャクシを見つけ、みんなで大喜びしたことを覚えている人も

いるかもしれません。あのような「いい」池でも、オタマジャクシの数はそんなに多くありませんでした。

ヒキガエルが成長し、繁殖できるようになるまでにはオスで1年半、メスでは2年以上かかると言われています(松井、1996)。今年生まれた子どもたちが大きくなってふるさとに戻って来た時には、もっともったいい池になっているように今年もがんばって池さらいをしようと思います。

(西澤 真樹子)

■館長コーナー

春 1

ワラビ採りは見つけたワラビを見て歩くのではなく、次のワラビを見つけながら歩くのです

この冬は厳しい寒さの年でした。以前、日本は厳しい寒さと暑さがあるから、素晴らしい人材が輩出するのだ、という説を読んだことがあります。特にこの冬は貝塚の平野部でも毎日のように氷が張っていました。その寒さも三寒四温を数回繰り返して、春本番となります。春を待つ心が熟していただけに今年には格別の春を迎えることになるでしょう。

春は季節がそうなるだけで心がうきうきします。まして、自然と深く付き合っただけで数十年も経過した私には、うきうき、わくわくです。4月に入るや否や「ワラビ」と「タラの芽」採りです。山菜採りはそれぞれ「自分のシロ」があって、そこに行けば何とか

「荷」になるはずなんです。しかし、最近
は元気なお年寄りが増え野山を何回も往復
したり、乱獲がたたったりで、収穫の予定
が立たなくなりました。また、いくら「シ
ロ」を持っていても、ワラビなどは10年過
ぎますとシロではなくなります。草木が茂
り、向日性のワラビは育たなくなるのです。

ワラビ採りの面白さは「短時間にたく
さん採る」ことにあります。最初のワラビを
見つけます。見つけた方向に歩きながら、
別の2番目を探します。最初に見つけた所
付近に到着したら丹念に周りを見回します。
ワラビはよく群で芽だしするからです。そ
して、最初の場を採り終わると、2番目の
方向に歩きながら3番目を探します。これ
を繰り返すのです。時折イレギュラーがあ
ります。次の次に採る予定が見つからない
とき、ひと目で何場所も見つけることが
できたときなどです。見つからないのは仕
方ないとして、たくさん見つけたときは、
頭の中は大変です。採りに行く順をしっ
かりシュミレーションしないと上へ行っ
たり、下がったり、イバラに何回も引
つかかれたりという羽目に陥ります。そ
こが「短時間にたくさん採る」という
体力と頭脳と過去の経験が一体とな
ったゲームの妙です。

ワラビが出始めて1週間ほど過ぎます
と、ゼンマイが顔を出します。ゼンマイ
は1つの株でたくさん収穫できますが、
その株には孢子葉と栄養葉があり普通、
孢子葉は食べません。大きなシロでは
あつという間にたくさん採ることができ
るのもゼンマイ採りの特徴です。冬の
間に枯葉となったゼンマイの株をたく
さん見つけておいて自分のシロにし
てしまうことがコツです。

ワラビやゼンマイを何回か収穫して
気温が高くなってくる4月の中旬以降
は「フキ」です。フキはひっこ抜いた
りしますと、必ず根まで取れてしま
いますので、私は鎌でパッチワーク
様に刈り取ります。昆布を入れた
キャラブキは忘れることのできない
美味です。たくさん作って知り合
いに食べてもらうことにしています。

「春1」は山菜採り情報になってしま
いました。是非参考にして野山を歩
いてください。谷ごとに違う鶯うぐいすの囀さえずりを聴
きながら、心の底までマイナスイ
オン一杯の、できれば深山幽谷しんざんゆうこくの自然に接
してみられてはどうでしょう。

(川村 甚吉)



■ 投稿

日本および東南アジア産 ズイムシハナカメムシ亜科（半翅目： ハナカメムシ科）の系統分類学的研究

ズイムシハナカメムシ亜科（Lyctocorinae）は、半翅目ハナカメムシ科（Hemiptera: Anthocoridae）に属する体長1.5-4.0mmの微小な捕食性カメムシ類で、世界から35属250種が記録されています。ハナカメムシ類は、防除が困難とされる微小な害虫を効率よく捕食することから、生物的防除資材としての利用価値が高いと考えられており、すでに欧米ではヒメハナカメムシ属（*Orius*）が生物農薬として製品化されています。ヒメハナカメムシ属が含まれるハナカメムシ亜科（Anthocorinae）では分類学的研究が比較的進展しているためその利用が可能となっていますが、ズイムシハナカメムシ亜科相の解明度は極めて低く、特に熱帯・亜熱帯地域においてほとんど解明されていません。日本においては、安永（2001）によって7属13種が記録されていますが、琉球列島を中心とした亜熱帯地域の調査が不十分で、東南アジアにおいては、Distant（1910）以来、100年余り分類学的な研究がまったく行われていないのが現状です。本亜科の系統分類学的研究を行うことは、生物的防除資材としての利用だけでなく、生物多様性保全の観点からも重要です。

本研究では、生物的防除ならびに生物多様性研究の基礎資料とすることを目的として、日本および東南アジア産のズイムシハ



ナカメムシ亜科の種について、外部形態形質に基づいた族（tribe）ならびに属（genus）間の系統関係の推定、分類体系の確立、生態的特性の解明（分布パターンの解析、生息場所・食性の進化に関する考察）を行いました。

分類体系

系統解析の結果に基づいて分岐分類学的手法により種を高次の分類単位である属・族に割り当て、再配列した結果、日本および東南アジア産ズイムシハナカメムシ亜科に5つの族を認めました。所属不明であった4種はそれぞれ新属として扱い、4日本新記録種、4東南アジア新記録種、22新種を含む15属43種を認めました。

・ Lyctocorini 族（1属5種）

本族は *Lyctocoris* 属のみを含みます。*Lyctocoris* 属は、世界中に27種程度を含む属で、そのほとんどは全北区から知られています。一般に4mm程度で大型の体をもち、一見してアシプトハナカメムシ属（*Xylocoris*）の種と似ていますが、前胸背に側角毛を欠くことや、臭腺の開口部の形状で区別できます。本研究によって、1日本新記録種1新種を含む計5種を認めました。

・ Xylocorini 族 (1 属 7 種)

本族は *Xylocoris* 属のみで構成されます。*Xylocoris* 属は、世界中におよそ 50 種を含む大きな属で、その多くが旧北区から知られます。各種は 2-3mm の卵形もしくは長卵形の体を持ち、光沢の強い暗色系の色彩を呈します。本属には 4 つの亜属が含まれ、今回 *Proxylocoris* 亜属 4 種(2 新種を含む)、*Xylocoris* 亜属 1 種、*Arrostelus* 亜属 2 種(1 新種を含む) の計 7 種を認めました。

・ Scolopini 族 (1 属 5 種)

本族は 2 つの亜族に分けられますが、本研究では *Scolopina* 亜族に含まれる *Scoloposcelis* 属のみが確認されました。*Scoloposcelis* 属は、世界の温帯から熱帯にかけて 10 種あまりが知られ、暗色で細長く平たい体を持ち、背面は多少とも光沢があり、軟毛はほとんどないことで特徴付けられます。今回 3 新種を含む計 5 種を認めました。

・ Almeidini 族 (2 属 3 種)

熱帯系の小規模な族で、東南アジアからオーストラリア区にかけて分布する 3 属が知られます。体は光沢が強く長毛でおおわれ、背面には深く明瞭な点刻をそなえます。今回 *Almeida* 属 (1 種) と *Lippomanus* 属 (1 新種を含む計 2 種) の 2 属 3 種が確認されました。

・ Dufouriellini 族 (10 属 23 種)

本族は本亜科内でもっとも多く属を含む最大の族で、熱帯や亜熱帯地域を中心に およそ 10 属 70 種が知られます。本族に含まれる属の形態はさまざまですが、一般に口吻は短いこと、脛節先端のスポンジ状の毛束が小さいこと、雌は産卵管をもたない

ことで特徴付けられます。*Dysepicritus* 属 (1 新記録種)、*Brachysteles* 属 (1 新種)、*Amphiareus* 属 (2 新種を含む計 5 種)、*Cardiastethus* 属 (1 新記録・1 新種を含む計 3 種)、*Buchananiella* 属 (1 新記録・2 新種を含む計 3 種)、*Physopleurella* 属 (2 東南アジア新記録・4 新種を含む計 6 種) が認められました。また、所属不明の 4 種はそれぞれ新属として扱いました。



分布

Lyctocoris 属や *Xylocoris* 属は、温帯域の要素をもつ種も含まれ属全体としては広域に分布することが示されました。*Scoloposcelis* 属や *Almeidini* 族は、小笠原諸島固有の種を含みますが、他はすべて東南アジアに広域に分布する種でした。*Dufouriellini* 族の種は、広域に分布する種が含まれる *Amphiareus* 属、*Cardiastethus* 属の一部をのぞくと、すべて東南アジアに

広域分布あるいは東南アジアに固有分布する種でした。各種の分布パターンと系統関係から、中国大陸などの温帯、冷温帯に分布していたものが亜熱帯、熱帯に分布を広げ、東南アジアを中心に多様化したと考えられました。

生息場所・食性と系統関係

本亜科の種は捕食性ジェネラリストですが、族や属などのグループによって生息場所や餌に違いが見られました。*Lyctocoris* 属は一般に樹皮下に生息し、コウチュウ類の幼虫を捕食することが知られていますが、*L. campestris* は自然下では樹皮下に生息するものの、貯蔵穀物環境にも侵入することが知られています。また、本研究では *Lyctocoris* 属 2 種がタコウキン科のキノコから確認されたことから、これらの種はキノコなどの菌類に寄生する昆虫の幼虫を捕食していると考えられました。*Xylocoris* 属の種も *Lyctocoris* 属と同様に今回確認された 7 種のうち 1 種が樹皮下から採集されたとともに、3 種が貯蔵穀物環境で発見され、チョウ目やコウチュウ目などの貯穀害虫の幼虫を捕食していると推定されました。また、*Scoloposcelis* 属では 3 種すべてが樹皮下から見出されました。これらのことから、樹皮下から貯蔵穀物環境への進出が *Lyctocoris* 属や *Xylocoris* 属で独立に何度か起こったと推定されました。

一方、*Almeidini* 族の種はすべて林床落葉層に、*Dufouriellini* 族の種はほとんどが樹上部に残った枯れ葉のついた枝や伐採枝などに生息していました。このことから、前者は林床落葉層で主にトビムシ類などの

微小土壌動物を、後者は樹上部の枯れ葉などでクダアザミウマ類やチャタテムシ類などの微小昆虫を捕食し、多様化したと推定されました。

(大阪府立大学大学院農学生命科学研究科
農学環境科学専攻博士後期課程 山田量崇)

※ 本報告は当館のスタッフである山田量崇氏の博士論文の要旨です。2006年3月31日付で農学博士の学位を取得致しました。

■ 寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2006年3月分まで)

<哺乳類>

◆ 食野俊男さんより

ハツカネズミ死体 1 点

貝塚市新町 2006年3月13日拾得

◆ 谷口まさとしさんより

コウベモグラ死体 1 点

熊取町小垣内 2006年3月16日拾得

<鳥類>

◆ 食野俊男さんより

スズメ死体 1 点

貝塚市近木 2006年1月4日拾得

◆ 山口フミ子さんより

ホオジロ死体 2 点 (成鳥 1・幼鳥 1)

貝塚市馬場 2005年11月9日拾得

◆ 廣野光子さんより

ハマシギ死体 1 点

貝塚市二色潮騒橋 2006年2月25日拾得

◆飯田政治さんより

ヒドリガモ死体 1点
拾得データ不明

<両生類>

◆山口フミ子さんより

ニホンヒキガエル生体 1点
貝塚市大川 2006年3月17日採集

<昆虫>

◆澤田義弘さんより

チャイロオオイシアブ 1点
ヤマトアブ 1点
ヒゲナガヒロクチバエ 1点
シオヤアブ 2点
以上、北海道苫小牧市苫小牧演習林
2004年8月4日採集

ハマベバエ 1点
ヒトテンツヤホソバエ 5点
ヒメフンバエ 2点
ミドリキンバエ 1点
以上、北海道厚岸町大黒島
2004年6月17日採集

など昆虫 33点

◆佐々木仁さんより

ヒラタクワガタ♂1点
貝塚市千石荘 2001年7月20日採集
オオシロオビゾウムシ 1点
貝塚市馬場 2005年6月10日採集

◆田平叶夢さんより

エグリゴミムシダマシ 1点
貝塚市蓄原 2006年3月26日採集

◆宇土和樹さんより

ナナホシテントウ 1点
貝塚市蓄原 2006年3月26日採集

◆白井健太さんより

オオカマキリ卵囊 1点
シロジュウシホシテントウ 1点
貝塚市蓄原 2006年3月26日採集

◆西村恒一さんより

クモガタヒョウモン 1点
1996年6月15日採集
ヤクシマルリシジミ 2点
1994年7月17日採集
オオミドリシジミ 1点
1999年6月13日採集
オオミドリシジミ 1点
1994年7月2日採集
以上、和泉葛城山五本松～山頂部採集

<甲殻類>

◆河野 洋さんより

カニ類を中心とした標本コレクション
882点 1950-1960年代採集

◆鈴子佐幸さんより

テナガツノヤドカリ 1点
近木川河口左岸 2006年2月5日採集

<軟体動物>

◆鈴子佐幸さんより

キクザルガイ 1点
近木川河口左岸 2006年1月28日採集
イガイ科 ツヤガラス 1点
泉大津沖(底引き網) 2006年3月2日採集

◆濱谷 巖さんより

ヤマトウミウシ 2点
和歌山市加太 1971年4月11日採集

<扁形動物>

◆濱谷 巖さんより

クロスジコウガイビル 生体1点
岸和田市別所町 2006年3月28日採集



マッチ棒

させて頂きました。(山)

3月26日 貝塚市でショウロが見つかりました。砂糖のかかった丸いお菓子「松露」のモデルになったキノコのことです。最近では見つかることが少なくなった珍しいキノコです。(湯)



ショウロ (3月31日撮影)

■遊学館スタッフ日誌

1月20日 大阪市立生き生き地球館で飼育・展示されていたタガメの成虫を譲り受けました。2月2日には、タガメの他に、オオコオイムシ、タイコウチ、ガムシの成虫も譲り受け（自然遊学館の調査で貝塚市内において確認されているのはタイコウチだけです）、現在、当館で飼育展示しています。(岩)

2月20日 吹田市にお住まいの河野 洋先生が1950年～1960年代に南紀を中心に全国各地で蒐集されたカニ類や海産動物群の標本コレクション882点の寄贈を受けました。河野先生からは以前にも多くの貴重な標本コレクションを寄贈頂いており、平成13年の夏期特別展「カニの世界」で公開

3月31日 貝殻を退化させた巻貝の仲間、ウミウシ。このグループの種名を調べる際には、外形や色彩をもとに図鑑とにらめっこして判断する場合がありますが、もっと本格的に同定する場合には歯舌しぜつとよばれる部分の検討が必要となってきます。この歯舌を標本にする方法について、ウミウシの分類をご専門に長年研究されている岸和田市にお住まいの濱谷 巖先生に講習していただきました。(山)

最最近、田中君、木室君のふたりのジュニア学芸員がめざましい活躍を見せています。「3回休んだらクビ」というきびしい掟を自ら課して、飼育動物のエサやり、水替えや清掃、展示レイアウトの構成、来館者へのガイド、観察会の補助などに加え、自分自身の研究までもこなしています。その熱

心な活動の様子は某自然史博物館の学芸員のホームページでも紹介されたほど。近々、自分たちのオリジナル新聞「ジュニア学芸員だより」も刊行するそう。今から楽しみです。ジュニア学芸員になると、館のスタッフと同じデザインのオリジナル名札をつけることができるほか、各分野のスタッフから標本の作製方法などの専門的な指導を受けることもできます。興味のある人は、自然遊学館までどうぞ。(西)



がんばるジュニア学芸員たち



ありがとう



浅井眞紀子さん(自然遊学館わくわくクラブ会員)は、いつもお嬢さんの夏海ちゃん・いずみちゃんを引き連れて、野に山に海に自然遊学館に出没し、手作りお菓子の差し入れ、調査や行事の手伝い、破れた網の修繕、自然生態園作業など数え上げたらきりがないほどボランティアしていただき

ましたが、この春転勤で長崎へ。「長崎へ遊びに行ける」と言い聞かせて、さびしさに耐えています。このぼっかり空いた穴が、貝塚でも長崎でも、新しい方との出会いで埋まりますように。



自然遊学館の前で

食官のパソコンに、誰が名づけたか「メッシーニュース 朝刊」と張り紙がありました。食野俊男さん恒例貝塚市内駆け巡り、メール版「自然・生きもの探訪記」です。時にはハツカネズミやスズメの死体も届けてくださいます。

最近、食野さんに限らず、たくさんの方がいろんな情報を持ってきてくださるようになりました。私たちは広範囲な貝塚の自然状況を居ながらにして手にすることができ、とても喜んでます。

鈴子さんのご家族(自然遊学館わくわくクラブ会員)には、行事の手伝い・自然生態園作業・貝塚での新しい生きもの発見・ビーズトンボの製作など、大変お世話になっています。この春大学2年生になる達也さんとは小学校3年生の時からのお付き合いですが、冬休みに帰郷された折、自然遊

学館わくわくクラブが自然史フェスティバルに出展することを知って、搬入・展示・解説・撤収と大活躍。また自然遊学館報告書の口絵に使う生物写真 300 枚を、岡田尚子さんとともにカラープリンターから打ち出してくださいました。小柄で大人しかった小学生が生物分野に進学し、私たちの仕事をてきぱき手助けしてくれるのを見ると、うれしくなってしまう。

(白木)



フェスティバルで販売したハッサクの看板(？)
(わくわくクラブ日高さん、岩崎拓さん合作)

■おしらせ

2006 年度行事予定表ができました

自然遊学館の 2006 年度行事予定表ができました。蕎原での化石採集行事が復活し、館長と切り絵制作など今年も新しい企画や行事がもりだくさん。行事予定表は自然遊学館館内や貝塚市役所で配布しているほか、

自然遊学館のホームページでも見るができます。予定表は F A X でお送りすることもできますので、ご連絡下さい。

「近木川と子どもたち」写真展

期間：4 月 20 日～5 月 9 日

場所：貝塚市山手地区公民館

四季折々の近木川の景観と、そこに遊ぶ子どもたちの様子を、おもに写真を用いて紹介します。なお、山手地区公民館は水曜日が休館日で、開館時間も自然遊学館と異なりますので、貝塚市ホームページなどでお確かめの上、お越してください。

「貝塚の自然 第 8 号」発行

当館の 2004 年度に行った調査活動や観察会、展示、資料収集などをまとめた報告書を 300 部発行しました。近隣図書館、市内の公民館、学校、文献交換している博物館などに配布しています。また、今号より国際的なコード番号である ISSN (国際標準逐次刊行物番号) が付与され、国立国会図書館に第 1 号から最新号まで国内資料として保管されることになりました。

自然遊学館だより 2006 春号 (No. 39)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色 3 丁目 26-1

Tel. 0724 (31) 8457

Fax. 0724 (31) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2006. 4. 10

この小冊子は市内印刷で作成しています。